

字音接辞の分類

張 明

[キーワード：①字音接辞 ②分類 ③品詞 ④意味]

1. はじめに

本稿は、現代日本語の字音接辞（例えば、御、新、家など）には、どのようなものがあるのかを明らかにし、また、どのように分類すればよいのかということについて考察するものである。

字音接辞を網羅的にリストアップしたものには、北條（1973）があるが、「接頭辞」「接尾辞」以上の細分類は行っていない。一方、字音接辞の体系的な分類を試みたものは、野村雅昭・山下喜代両氏の一連の研究、石川（2016）があるが、いずれも一部のデータしか挙げられておらず、全データは示されていない。収集しているすべての字音接辞を示し、かつ体系的な分類を試みるものは、管見の限り見当たらない。本稿は、収集したすべての字音接辞を示し、かつ体系的に分類することを目的とする。

本稿の構成は以下の通りである。字音接辞を分類する前に、まずは、2節で、「字音接辞」の捉え方について述べる。3節では、字音接辞分類の先行研究を検討し、その問題点と本稿の分類基準を明らかにする。4節では、本稿の字音接辞をどこから採集したのか、データの取り方を説明し、5節では、全データを示し分類を行う。最後に、6節では、字音接辞を分類するということはどのようなことか、および今後の課題について述べる。

2. 「字音接辞」の捉え方

字音接辞を分類する前に、まず、「字音接辞」をどのように捉えるべきかということについて検討する。

2.1 字音接辞の「字音」とは

字音接辞は、語種による分類という観点から「漢語接辞」と呼ばれることもある（水野 1987、山下 2013a など）が、漢語ではなく、字音語という名称を用いる理由は野村

(1987) (1999) に言及がある。漢語の中には「日本語にはいつてからながい時間がたち、日本語の造語成分として機能している」(野村 1999: 2) ものがたくさん存在するという理由が大きい。

野村 (1987: 130) によると、「漢語とは、狭義には古代から近世にいたる期間に中国からもたらされた語のことをいう。ただし、一般には、それにならって日本で造語されたものをもふくめていうことが多い。後者の場合には、前者との混同をさけて、字音語ということもある」ということである。つまり、今日の日本に生きているいわゆる漢語は、古代の中国から伝達されたものだけでなく、日本語の中で独自の変遷を遂げ、日本語の造語成分として機能しているものもある。その意味で、漢語という名称ではなく、字音語という名称を用いるのが適切だろう。

本稿は、以上の理由により、「字音」という名称を使用し、漢語接辞ではなく、字音接辞と称する。

2.2 字音接辞の「接辞」とは

接辞という文法用語はおおよその共通理解が成立しているが、研究者や立場によっては、その規定が必ずしも一致するわけではない。そこでまず、主要な術語事典・辞典類の記述を取り上げて、現代日本語において接辞がどのように認識されているかを確認しておく。

2.2.1 術語事典・辞典類における接辞の規定

現代日本語においては、接辞がどのように認識されているか。それについて、日本語学の術語事典・辞典類における「接辞」の規定をまとめると、次の表1ようになる。

表1で示した8種類の術語事典・辞典類を総合的に見ると、接辞は主に3つの性質があることがわかる。

第一に、二重下線 で示した部分からわかるように、接辞は単独で語を構成することができず、常に語基と結合して語を構成する。これは多くの事典・辞典類に記述され、接辞としては、最も重要な性質といえるだろう。

第二に、波線~~~~~で示した部分からわかるように、接辞は形式的な意味を添えたり語の品詞を決定したりする機能を持っている。

第三に、点線.....で示した部分からわかるように、接辞と語基の間に音のポーズを伴わずに、一続きで発音される。

残念ながら、以上の3つの性質をすべて記述した事典・辞典類はないが、接辞は以上の3つの性質を持ち、一般的にその3つの性質を以て接辞として認識されていると考えられるだろう。

表1 術語事典・辞典類における接辞の規定¹⁾

事典・辞典類	執筆者	接辞に関する規定
『国語学研究事典』	不明	語構成要素の一つ。「お寺」「たなびく」「山本さん」「春めく」などの単語を、共時態として見た場合、その構造は、「寺」「なびく」「山本」「春」のように、もともと単独に用いられ得る性質を持つ主要素と、「お」「た」「さん」「めく」のように、 <u>単独には用いられることがなく、いつも他の語や語基に従属、融合して一語を構成する要素とに分析される</u> 。後者のような要素を接辞という。
『国語学大辞典』	阪倉篤義	派生語において語基に添加される結合形式。たとえば「お寺」「ほろ苦い」「君たち」「学者ぶる」「散歩がてら」などにおける傍線 ²⁾ の語のように、 <u>単独で用いられることはなく、常に他の語に添加され、これと二続きに発音されて一つの単語の構成にあずかっている形態素を言う</u> 。
『日本語百科大事典』 ³⁾	山口光	「接辞」とは、オ月サマのオ・サマのように <u>単純語にはなれない付屬的な形態素</u> のことで、語基(中心成分)の前につくのを「接頭辞」、後につくのを「接尾辞」という。
『言語学大辞典第6巻 術語編』	不明	屈折にせよ、派生にせよ、語が主要な部分と補助的な部分からなる構造をもつとき、その主要な部分を語幹といい、その語幹に付いてそれを補助する要素を接辞という。
『新版日本語教育事典』 ⁴⁾	秋元美晴	接頭辞とは、 <u>単独で語を構成することができず</u> 、常に語基の前について語を構成する結合形式をいう。接尾辞とは、 <u>単独で語を構成することができず</u> 、つねに語基の後について語を構成する結合形式をいう。
『日本語学研究事典』	斎藤倫明	語構成要素の一種。たとえば、「お話」「春めく」「うれしがる」という語は、それぞれ「お・話」「春・めく」「うれし・がる」と二つの語構成要素に分けることができるが、それらのうち、語の意味的な中核をなし、単独で語を構成することもできる要素(「話」「春」「うれし」)を「語基」(base)と呼ぶのに対し、 <u>単独で語を構成することができず、必ず語基と結合して形式的な意味を添えたり</u> 、「お」、 <u>一語全体の品詞を決定したりする</u> 。「めく」「がる」要素を指す。
『日本語文法事典』	斎藤倫明	語構成要素の一種。語を構成する要素の内、語の意味的な中核をなし、単独で語を構成することもできる要素を「語基」(base)と呼ぶのに対し、 <u>単独で語を構成することができず、語基と結合して形式的な意味を添えたり語の品詞を決定したりする要素</u> を指す。
『日本語大事典』	矢澤真人	語構成において、語基となる形態素の一定の位置に付いて全体で一語となる、 <u>独立性をもたない形態素</u> 。

2.2.2 字音接辞と字音語基の連続性

接辞の規定には、3つの性質が判断基準となることを2.2.1で見てきた。しかし、字音接辞に関しては適用が難しい面もある。上述の3つの性質すべてを兼ね備えた字音接辞は存在しないといえる⁵⁾。字音接辞は必ずしも上述の3つの性質を持っているとは限らない。字音接辞と字音語基には、連続性があり、明確に二分することができない(野村1977、山下2004、石川2016など)。以下では、2.2.1で述べた接辞の3つの性質がどのように字音語基と字音接辞に適用が難しいかについて具体的に見てみる。

まず、最も重要な性質と思われる「接辞は単独で語を構成することができず、常に語基と結合して語を構成する」ということであるが、このことは字音接辞にとっては、本当に重要だといえるのだろうか。本稿は、「漢語系接辞⁶⁾も多くは結合形式であると考えられるが、結合形式であることを、接辞の条件としてあまりきびしく考えないほうが良いのではないか」という水野(1987)の主張に賛同する。水野(1987:61)の例でいうと、「[営業部]の[部]や、[大規模]の[大]などは、「部がちがうとやり方がちがう」(サイズの)大はありません)のように、ほとんど同じ意味で単独に用いられることがある。したがって「部」「大」は結合形式ではないということになるが、「営業部」の「部」、「大規模」の「大」は、結合形式である「先進国」の「国」、「全世界」の「全」と一線を画すようには思えない」ということになる。本稿は、その立場に賛同し、水野(1987)と同様に、「[部][大]も「国」「全」と同様に漢語系接辞であるという立場」(同:61)をとる。つまり、2.2.1で述べた「接辞は単独で語を構成することができず、常に語基と結合して語を構成する」という性質は字音接辞に関しては重要ではなく、字音接辞であるかどうかを判断するには決定的な要因ではないと考えられる。

次に、「接辞は形式的な意味を添えたり語の品詞を決定したりする機能を持っている」ということであるが、これは当然ながら、すべての接辞がそのような機能を持っているという意味ではない。「形式的な意味を添える」ということについてであるが、野村(1978)ですでに考察されたように、「意味のうえで、実質的、形式的という差は、そう単純には、とらえられないものである。」(同:123)ということになる。「国際法」の「法」、「沿岸流」の「流」、「結婚式」の「式」など、接辞的に振る舞うものだと思われるが、表す意味は形式的だと考えにくい。逆に、宮島(1994)が主張している「無意味形態素」という概念であるが、「あばら家」の「あばら」や「ばた屋」の「ばた」は論理的には語基ということになるが、実質的な意味を表していないケースもある。つまり、「接辞は形式的な意味を添える機能を持っている」という性質は字音接辞であるかどうかを判断するには決定的な要因ではないといえる。また、「語の品詞を決定する機能」についてであるが、「亜熱帯」の「亜」や、「既婚者」の「者」などのように、語の品詞を変えない字音接辞は多々ある。「語の品詞を決定する機能」も字音接辞であるかどうかを判断するには決定的な要因ではないと考えられる。

最後に、「接辞と語基の間に音のポーズが伴わずに、一続きで発音される」という性質についてであるが、これも、字音接辞の中には例外がある。例えば、「当大学」「本研究所」「同美術館」「各言語」「全責任」などの例からわかるように、傍点で示した字音接頭辞が独自にアクセント核を持っており、その後につく語基の間にポーズが置かれることが一般的である。このように、「接辞と語基の間に音のポーズが伴わずに、一続きで発音される」という性質も字音接辞であるかどうかを判断するには決定的な要因ではないことがわかる⁷⁾。

以上のように、一般的に認識されている接辞の規定は、字音接辞にはうまく機能せず、字音接辞であるかどうかを判断するにあたっては、それ以外の条件を考える必要があることがうかがえる。

2.3 本稿における字音接辞の捉え方

2.2では、一般的に認識されている接辞の規定は、字音接辞にはうまく機能せず、字音接辞であるかどうかを判断するにあたっては、2.2.1で述べた3つの以外の条件を考える必要があることを確認した。簡単にまとめると、「単独で語を構成することができるかどうか」「形式的な意味を表すかどうか」「語基の品詞を変える機能を持っているかどうか」「直後にポーズがあるかどうか」という要因は、字音接辞であるかどうかを判断するには、決定的な要因ではないということである。字音接辞であるかどうかを判断するには、最も重要なのは「何と結合するのか」ということである。

よって、本稿の「字音接辞」の定義は、(1)で示したように、野村(1978)の「接辞性字音語基」の定義に従う。

- (1) すでに存在する、和語・外来語の語基、および、字音複合語基、そして、それらの結合形に、前部分あるいは後部分から結合する、字音形態素

(野村1978:104)

つまり、「すでに存在する、和語・外来語の語基、および、字音複合語基、そして、それらの結合形に、前部分あるいは後部分から結合する、字音形態素」のことを「字音接辞」という。ある字音形態素が「和語・外来語の語基、および、字音複合語基」と結合する以上、その字音形態素は単独で語を構成することできるとしても、形式的意味を表していないとしても、「字音接辞」として認める。字音接辞と結合する「和語・外来語の語基、および、字音複合語基」のことを「語基」と呼ぶ。

しかし、字音語における語基と接辞の捉え方の違いによって、(1)の規定に一致するものを野村(1978)のように、「語基」と見做す研究もあれば、本稿のように、「接辞」と見做す研究もある。

例えば、字音形態素「式」は、(2)のように、単独で使われる場合、すなわち語基である場合もあれば、(3)のように、(1)の定義に合致し、本稿のいう字音接辞である場合もあれば、(4)のように、二字漢語の構成要素である場合もある。

- (2) 式を挙げる 式で表わす
- (3) 卒業式 スパルタ式 西洋式 電動式 方程式
- (4) 形式 旧式 公式

(2)のように単独で使われることができるという理由で、「式」を語基とする研究もあれば、(3)のように、(1)の定義に一致する使い方があるという理由で、「式」を接辞とする研究もあるが、本稿は「式」が語基か接辞かのどちらかに分類されるという静的な見方で考えない。本稿は、水野(1987)を参考にし、(2)のように使われる「式」は語基であり、(3)のように使われる「式」は接辞であり、具体的にどのように使われるかによって、「式」は語基にも接辞にもなり得るという動的な見方で考える。

よって、本稿は、山下(2013b)と同様に、「字音形態素が造語(語形成)の上で、語基的にも接辞的にも振る舞うことがあるという事実を捉え、字音形態素が造語(語形成)において果たす機能によって、それを語基と見なすか、接辞と見なすかが決まる」という考えに従う。

本稿では、(2)のような使い方を「語基」、(3)のような使い方を「接辞」、(4)のような使い方を「二字漢語の構成要素」と呼ぶことにする。この3用法の組み合わせは理論的には以下の8つのパターンがある。

表2 1字字音形態素の存在パターン

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
語基	○	×	○	×	○	○	×	×
接辞	○	○	×	×	○	×	○	×
二字漢語の構成要素	○	○	○	○	×	×	×	×
例	式、悪	的、脱	意、損	影、混	存在しない			

二字漢語を構成することができない字音形態素は、常用漢字表と山下(2008)のデータを確認したところ、存在しないため、⑤～⑧は理論上ではあり得るが、実際には存在しない。つまり、常用漢字表にあるすべての字音形態素は①～④のどれかに分類することができる。そして、本稿の「字音接辞」は、①②に分類される字音形態素を指す。

2.4 二字漢語の構成要素について

2.3では、「すでに存在する、和語・外来語の語基、および、字音複合語基、そして、それらの結合形に、前部分あるいは後部分から結合する、字音形態素」のことを「字音接辞」といい、ある字音形態素が「和語・外来語の語基、および、字音複合語基」と結合する以上、「字音接辞」として認めるということ述べた。ここでいう「字音複合語基」とは、二字以上の漢語のことである。二字以上の漢語と結合する字音形態素は(1)の定義に一致し、字音接辞として認めることができる。それに対し、一字漢語と結合し、二字漢語を形成するものは(1)の定義に一致しないため、字音接辞として認めることができない。本節では、その「一字漢語と結合し、二字漢語を形成するもの」について考える。

二字漢語のことを字音複合語基と見做し、その品詞性や構造について考察した研究(宮地 1973、森岡 1994、野村 1988、1998、2013、斎藤 2016 など)はあるが、二字漢語は複合語か単純語か、二字漢語を構成する一字漢語は語基か語基でないかという語構成上の位置づけに関する論考は少ない。先行研究における断片的な記述を拾い、まとめると、次の表3のようになる。

表3 二字漢語およびその構成要素である一字漢語の位置づけ

		二字漢語の位置づけ			
		複合語	複合語基	単純語	言及がない
二字漢語を構成する一字漢語の位置づけ	語基	A. 石井 (2007)	B. 宮地 (1973) 野村 (1978) 森岡 (1994)	C. なし	D. 石野 (1988)
	語基でない	E. 阪倉 (1980)	F. なし	G. 野村 (1988)	H. 早津 (2005)
	言及がない	I. なし	J. なし	K. 斎賀 (1957)	L. 宮島 (1980)

表3からわかるように、二字漢語の語構成上の位置づけは難しい課題であり、研究者によって、立場が分かれる。

例えば、Aブロックの石井(2007:169)では、「多くの二字漢語も、「電話」「戦前」「禁煙」「洗車」のように、非自立的ではあるが語基の結びつきであり、複合語である」と述べている。二字漢語を複合語と見做し、その構成要素である一字漢語を語基と見做すことがわかる。

また、Bブロックは、現代日本語では、二字漢語は一語基相当であり、単一語基と区別して、二字漢語のことを複合語基と呼ぶという見方である。

Dブロックの石野(1988)は、「「建築」は「建」と「築」に、「基準」は「基」と「準」に分けることが可能である。この「建(けん)・築(ちく)・基(き)・準(じゅん)」の

4 形態素は、自立性こそ持たないが、意味の実質性（建てる・築く・基づく・準じる）や造語能力（建造・再建、改築・築城、基礎・開基、準備・水準）からして、接辞ではなく語基と見る」（同：419）と述べており、二字漢語の構成要素である一字漢語を語基と見做すことがわかる。しかし、二字漢語全体は複合語と見做すかどうかについては言及がないため、Dブロックにした。

E ブロックの阪倉（1980：551）は、「前学長」「前近代的」の「前」を接頭語とし、「前半」「前掲」の「前」を複合語構成要素としている。「複合語構成要素」という用語からわかるように、「前半」「前掲」などの二字漢語を「複合語」と見做す。その構成要素である一字漢語を「複合語構成要素」とするため、語基でないことがわかる。よって、Eブロックにした。

G ブロックの野村（1988）は二字漢語を考察対象とし、二字漢語の構造や結合パターンについて詳細に分析する論考である。二字漢語の語構成上の位置づけについて、次の(5)の指摘がある⁸⁾。

- (5) 現代語の二字漢語を分析するには、さまざまな困難が予想される。その最大のものは、現代語では、二字漢語が複合語であるという語構成意識が、ほとんどうすれてしまったことである。このことは、形態の面からも、意味の面からもたしかめられる。スルをともなってサ変動詞を構成したり、いわゆる形容動詞の語幹となったりするほか、文の成分となったり、他の言語単位と結合したりする点で、二字漢語は単純語とほとんどかわりがない。（同：45）

本稿も基本的に(5)の見方に賛同する。また、野村（1988）では、二字漢語を構成する一字漢語のことを「字音形態素」（同：49）と呼んでいるため、野村（1988）をGブロックにした。

H ブロックの早津（2005：232）は、単独で語となれない形態素を分類し、その中に、「いわゆる造語成分としての字音語（「医者」「校医」の「イ（医）」、「学問」「医学」の「ガク（学）」）がある。「医者」「校医」「学問」「医学」などの二字漢語については特に言及がないが、その構成要素である一字漢語「医」「学」をいわゆる造語成分として字音語と呼んでいるため、語基でないことがわかる。よって、Hブロックにした。

K ブロックの斎賀（1957）は語構成全体に関する論考であり、その中に、二字漢語についての言及がある。二字漢語については、「現代の一般の語意識としては単純語のように取り扱われる傾向がある」（同：242）としつつ、「二字漢語は、発生的見地から見た場合、当然二つの意味的要素から成り、その両要素の間にいくつかの意味的關係が存在する」と主張している。斎賀（1957）は、二字漢語を単純語と見做すと強く主張していないが、便宜上、Kブロックにした。

Lブロックの宮島（1980：423）には、「二字漢語の多くは複合語とも派生語ともつかない。「電話」「行進」などは非独立でしかも平等の重みをもつ二要素から成る点で、独立しうる要素から成る複合語とも、中心部分と付属部分とから成る派生語とも違っている」という指摘がある。二字漢語は複合語でも、派生語でもないという指摘は興味深い。二字漢語は結局何かという結論を提示していないため、Lブロックにした。

表3の諸立場の以外に、もう1つの立場がある。それが秋元（2005）である。秋元（2005：240）では、「読書」（書物を読むこと）などは和語の場合と同様に複合語と考えるが、「国際」「事故」などは分解不可能であり、普通、単純語とする。なお、「電話」はもともと「電話機による通話」であるが、現在では単純語とも理解される中間的な存在の語である」と述べ、同じ二字漢語とはいうものの、その中に性質が異なるものが混在しているため、一概に同じように考えるのではなく、ケースバイケースで考えるのが妥当だと主張している。

秋元（2005）に近い立場には、斎藤（2005）がある。「語構成要素の観点から見た場合日本語においてとくに問題となるのは漢語で、「教室」「黒板」「未熟」など明確に語構成要素（字音形態素と呼ぶ）に分けられるものから、「哲学」「磁石」「維新」などの中間的なものを介し、「挨拶」「慇懃」「齟齬」など形式（漢字）的に分けられても意味のうえからはまったく分けられないもの（この類は仮名書きにするのが望ましい）まで、語構成論的にはさまざまなものが含まれる」（同：67）と述べている。

以上のように、二字漢語の語構成上の位置づけ問題の難しさがわかる。最も理想的なのは、秋元（2005）と斎藤（2005）のように、二字漢語のことを結合関係が比較的透明で構成要素の抽出が可能なもの・中間的なもの・結合関係が比較的不透明で構成要素の抽出が不可能なものというように三段階に分けて考える見方だと思われる。しかし、三段階を区別して分析することは現段階では難しい。したがって、本稿は、暫定的に、野村（1988）の（5）に賛同する立場をとる。つまり、語源的な観点ではなく、現代日本語の語構成意識を重視し⁹⁾、二字漢語を単純語のように取り扱ってもさほど問題がないと考えられる。その二字漢語を構成する一字漢語は語基と見做さず、「二字漢語の構成要素」と呼んでおく。

3. 字音接辞の分類に関する先行研究

字音接辞の分類を試みた研究は、野村雅昭と山下喜代両氏の一連の研究、石川（2016）などがある。先述したように、いずれも一部のデータしか挙げておらず、全データは示されていない。本節では、野村（1978）、山下（2013b）と石川（2016）を代表として検討し、問題点を指摘する。

3.1 野村 (1978) について

野村 (1978) は現代新聞の用例をもとに、接辞性字音語基の用法や分類について詳細な考察を行っている。異なり語数 250 の前部分の接辞性字音語基を「①体言型」「②連体修飾型」「③連用修飾型」「④連体詞型」「⑤用言型」「⑥否定辞型」「⑦数量限定型」「⑧敬意添加型」の 8 種に分類し、また、異なり語数 605 の後部分接辞性字音語基の分類については、まず品詞性によって、「①体言型」「②用言型」「③相言型」の 3 種に分類した。「①体言型」は、意味によって、更に「時」「組織・集団」「人間」「事象」「活動」「精神・抽象」「物」「範疇・分野」「位置・順序」「数量・程度」「助数詞」に細分類している。

この野村 (1978) の前部分の接辞性字音語基の分類では、「①体言型」「④連体詞型」「⑤用言型」は品詞による分類であり、「②連体修飾型」「③連用修飾型」は結合関係による分類であり、「⑥否定辞型」「⑦数量限定型」「⑧敬意添加型」は意味的な観点からの分類である。つまり、前部分の接辞性字音語基について 3 つの分類基準を設けているということになる。このこととの関係もあり、「②連体修飾型」と「④連体詞型」の違いがわかりにくいという問題が生じる。

金水 (1983: 123) によれば、意味の面から連体を考えると、その機能を大きく二つに分けて考えることができる。一つは名詞句の概念の限定・修飾であり、もう一つは名詞句の指示機能に関する性格付けである。この二つの機能の別によって、連体詞を語彙的にほぼ二分することが可能である。当然ながら、すべての連体詞は連体修飾の機能を持っているが、野村 (1978) では、「②連体修飾型」と「④連体詞型」に分けており、「④連体詞型」は連体修飾の機能を持っていないように見えてしまう。おそらく野村 (1978) のいわゆる「②連体修飾型」は金水 (1983) の「名詞句の概念の限定・修飾」のことであり、「④連体詞型」は「名詞句の指示機能に関する性格付け」のことだと思われるが、「②連体修飾型」「④連体詞型」という名称だけでは区別しがたい。

また、前部分の接辞性字音語基も後部分の接辞性字音語基も意味による分類が行われている。意味による分類は主観的な部分が大きいという欠点がある。例えば、「園 (保育～)」「館 (図書～)」「場 (競技～)」を「組織・集団」に分類しているが、「場所」に分類していない理由は何か、「学 (物理～)」「説 (天動～)」を「活動」に分類しているが、「精神・抽象」に分類していない理由は何か、などの疑問が生じる。それは分類基準の客観性の欠如という問題に起因していると考えられる。本稿では、分類にあたって「意味」を使うが、客観的な分類基準を設けることを心掛ける。

こうした問題点があるとはいえ、野村 (1978) は字音接辞の分類の先駆的研究であり、「品詞」による分類などの点においては、大いに参考になる。

3.2 山下 (2013b) について

山下 (2013b) は、主に国語辞典を資料として、そこに見出し語として収録されてい

る「接辞」と「造語成分」をデータとする。語数 249 の前部分字音形態素を意味によって、「形容」「指定」「行為作用」「事物」「待遇」「精神」「可否」「組織集団」「その他」の 9 種に分類している。語数 669 の後部分字音形態素も同様に意味によって、「事物」「類別」「空間」「精神」「人物」「行為作用」「組織集団」「分別」「時間」「数量程度」「様相」「待遇」の 12 種に分類している。

「意味によって分類することは、個々の字音形態素についてその意味や造語機能を明らかにするのに役立つ」(山下 2013b: 89) という利点はあるが、前述したように、分類基準の客観性の欠如という問題がある。しかし、前部分と後部分を同様の分類基準で分類するという立場に賛同する。

3.3 石川 (2016) について

石川 (2016) のデータは主に各種の国語辞典や、北條 (1973) を参考にしたものである。斎藤 (2007) に倣い、漢語の接頭辞は意味的な観点から「①敬意・美化」「②程度」「③状態」「④否定」「⑤その他」に分類している。漢語の接尾辞は品詞決定の観点から「①名詞をつくるもの」「②形容動詞をつくるもの」「③サ変動詞(～する)をつくるもの」「④副詞をつくるもの」「⑤助数詞」に分類している。

まず、前述したように、漢語の接頭辞の意味による分類が問題である。山下 (2013b) と石川 (2016) の 2 つの研究とも接頭辞を意味によって分類しているが、異なる分類結果になり、客観的な分類基準を設けていないことによる個人差がうかがえる。次に、漢語の接頭辞と接尾辞をそれぞれ別の観点から分類することも問題である。山下 (2013b) のように、同様の分類基準を用いて分類することが望ましいだろう。

以上からわかるように、字音接辞を分類する問題点としては、①分類基準の不統一、②意味で分類する際の客観性の欠如、という 2 点が挙げられる。よって、本稿は分類基準を統一し、かつ客観的な分類基準を用いて、接頭辞と接尾辞を品詞的¹⁰⁾に分類することを試みる。

4. 資料とデータの取り方

本稿のデータとなる字音接辞をどのように抽出するのかについて述べる。まず、常用漢字表の 2136 字を対象とし、「扱」「脇」などの訓読みしかな漢字 72 字を除外する。次に、音読みがある漢字を検索語として表 4 で示した 7 冊の国語辞典で調べる。

表4 調査対象とする国語辞典

国語辞典	出版社	出版年	略称
岩波国語辞典 第7版	岩波書店	2009	岩波
学研現代新国語辞典 改訂第五版	学研教育出版	2012	学研
三省堂国語辞典 第七版	三省堂	2014	三国
集英社国語辞典 [第3版]	集英社	2012	集英社
新選国語辞典 第九版	小学館	2011	新選
新明解国語辞典 第七版	三省堂	2012	新明解
大辞林第三版	三省堂	2006	大辞林

チェックするのは、国語辞典に書かれている「用例」である。(1)の字音接辞の定義に合致する用例、すなわち、二字（以上）漢語や、和語、外来語と結合する「用例」が提示されている場合に接辞と認め、表2の①か②に分類する。ただし、7冊の国語辞典で合わせて2つ以上の異なる用例がなければならない。例えば、「家」は国語辞典で「勉強家」「専門家」などの多数の三字漢語の用例が確認できるため、「家」を字音接辞と認め、表2の①か②に分類する。それに対し、「針」「偏」は7冊の国語辞典を調べても「避雷針」「偏頭痛」という用例しかないため、字音接辞と認めず、表2の③か④に分類する。また、「哀愁」の「哀」や、「勇敢」の「敢」のように、二字漢語の例のみの場合は、字音接辞と認めず、表2の③か④に分類する。

以上は字音接辞であるかどうかを選定する作業である。その作業について補足する点が4つある。

第一に、三字漢語の用例は、野村（1974）のⅠ型とⅡ型に限定する。野村（1974）によれば、三字漢語は基本的に2つの型が存在する。「Ⅰ型<(○+○)+○>…(a1+a2)+a3：文化人・機関車・事務員・現代的」と「Ⅱ型<○+(○+○)…a1+(a2+a3)：超結核・急停車・不完全・各隊員>」の2つの型である。本稿の用語で言い換えるなら、Ⅰ型は字音接尾辞で、Ⅱ型は字音接頭辞である。しかし、「この二つの型以外の構造を持ったものがある。一つは、「月風花・松竹梅・市町村」のように、それぞれの漢語語基が対等の資格で一次結合しているものである。「有頂天・金輪際・不世出・未曾有」のように、本来の語構成意識が失われているものも、これに準じて考えることができよう。もう一つは、「重軽傷・陶磁器・祖父母」のように、二字漢語が結合して三字漢語化したもの」（野村1974：pp.39-40）がある。以上のようなものは三字漢語の用例とはいえ、用例の中に字音接辞が存在しないため、用例としてカウントしない。

第二に、例えば、「極」という字を調べる際に、「多極化」という用例が確認される。その場合、「[[[多極]化]]」という構造になっているため、「極」の用例としてカウントせず、「化」の用例としてカウントする。ただし、「殺ダニ剤」のように、「[[[殺[ダニ]

剤]] というような複次結合した構造を持っている用例は、「殺」と「剤」の両方の用例としてカウントする。

第三に、例えば、「最上階」「原住民」のように、「[[最上]階]」なのか、「[[最]上階]」なのか、判断しがたい用例がある。そのような用例はカウントしない。

第四に、7冊の国語辞典で合わせて2つ以上の異なる用例がなければならぬと規定するが、ほかの用例が容易に想定できるのであれば、用例が1つしか抽出しなかったとしても、カウントする。例えば、「菜」は7冊の国語辞典で「花椰菜」という用例しか抽出しなかったが、「青梗菜」「空芯菜」などの用例が容易に想定できるため、「菜」は字音接尾辞として認める。

最後に、『大辞林』と『新明解』を参考にして、単独で使えるかどうかを判断する作業を行う。『大辞林』では、漢字一文字のものは、普通の「見出し語」と「漢字見出し」の両方に出現する場合がある。『新明解』も同様に、漢字一文字のものは、普通の「見出し語」と「字音語の造語成分」の両方に出現する場合がある。確認するのは、「漢字見出し」（『大辞林』）あるいは「字音語の造語成分」（『新明解』）ではなく、普通の「見出し語」として登録されているかどうか、およびその用例である。どちらかの辞書で「愛を注ぐ」のように単独で使われる用例が確認された場合に、それを単独で使えると判断し、表2の①に分類する。それに対し、「家」のように「見出し語」に登録されていない場合、あるいは「館」のように「見出し語」には登録されているが、単独で使われる用例が確認されない場合は、単独で使えないと判断し、表2の②に分類する。

以上は単独で使えるかどうかを判断する作業である。その作業について補足する点が2つある。

第一に、単独で使われる用例は現代日本語の用例でなければならない。例えば、「圏」は『大辞林』の見出し語として登録され、「其ーとーとの間は決して一様ではなく」という用例も確認されたが、現代日本語の用例ではないため、「圏」を単独で使えないと判断する。

第二に、例えば、「本」は「おもしろい本を読む」というように、単独で使われる。しかし、それは「本放送」「本研究所」の「本」とは関係がないと思われる。このような場合も、単独で使われる用例が確認されたとしても、接辞として使われる「本」と関係がないため、単独で使えないと判断する。

以上の手順を踏まえて、すべての1字字音形態素を表2の①～④のどれかに分類できた。繰り返しになるが、本稿の字音接辞は、表2の①②に分類するものである。次節では、表2の①②に分類したものを統一された、かつ客観的な分類基準を用いて、品詞的に分類することを試みる。

5. 字音接辞の分類結果

分類すると同時に、表2の①②に分類するものの全データを挙げる。各接辞の後ろに2つの用例を挙げる。各表の点線の上は単独で使えないもの、すなわち表2の②に属するものである。点線の下は単独で使えるもの、すなわち表2の①に属するものである。データに出現した結合形中の用法によって一義的に分類した。例えば、「自意識、自墮落」の「自」は「①名詞型」、「自東京、自六時」の「自」は「⑦助詞型」ということになる。それぞれ、「自₁」「自₂」で区別する¹¹⁾。

5.1 字音接頭辞の分類結果

字音接頭辞（語数 238）は「①名詞型」「②形容詞型」「③連体詞型」「④副詞型」「⑤動詞型」「⑥助動詞型」「⑦助詞型」「⑧接続詞型」の8種に分類する。

まず、接頭辞が後接語基に対して連体修飾的な機能を持つという点で共通する「①名詞型」「②形容詞型」「③連体詞型」を見る。

表5 字音接頭辞の「①名詞型」（語数：64（26.9%））

① 名 詞 型	英（英会話、英単語）、褐（褐鉄鉱、褐寛博）、肝（肝硬変、肝機能）、皇（皇太子、皇太后）、私（私生活、私企業）、自 ₁ （自意識、自墮落）、女（女学生、女店員）、床（床ニフス、床ヘボン）、腎（腎不全、腎機能）、酎（酎ハイ、酎ロック）、賃（賃仕事、賃餅）、豚（豚カツ、豚もつ）、農（農学士、農作業）、鼻（鼻粘膜、鼻中隔）、仏（仏政府、仏文学）、母（母集団、母細胞）
	胃（胃下垂、胃潰瘍）、陰（陰電子、陰電気）、角（角速度、角ざとう）、核（核兵器、核戦争）、寒（寒念仏、寒稽古）、逆（逆光線、逆回転）、牛（牛なべ、牛飯）、京（京人形、京野菜）、金（金ボタン、金相場）、銀（銀世界、銀紙）、軍（軍資金、軍幹部）、気（気だるい、気高い）、劇（劇作家、劇映画）、県（県知事、県政府）、玄（玄小麦、玄ソバ）、公（公生活、公学校）、紺（紺サージ、紺がすり）、左（左大臣、左心室）、士（士大夫、士君子）、市（市役所、市議会）、地（地ビール、地卵）、州（州知事、州議会）、住（住生活、住環境）、実（実生活、実世界）、心（心不全、心疾患）、性（性教育、性道徳）、禪（禪問答、禪囃子）、村（村議会、村夫子）、地（地磁気、地教委）、茶（茶柱、茶畑）、腸（腸捻転、腸カタル）、伝（伝定家筆、伝俊成筆）、都（都条例、都知事）、道（道経済、道知事）、胴（胴まわり、胴抜き）、熱（熱機関、熱気球）、年（年単位、年会費）、能（能舞台、能装束）、脳（脳神経、脳出血）、鉢（鉢植え、鉢巻き）、番（番小屋、番ぎせる）、府（府知事、府議会）、盆（盆供養、盆踊り）、綿（綿製品、綿シャツ）、紋（紋ちりめん、紋タオル）、洋（洋家具、洋定食）、陽（陽電気、陽電子）、和（和菓子、和定食）

名詞型とはいえ、名詞性の接頭辞と後接語基との間に、意味上の格関係が見られないのがほとんどである。後接語基に対して連体修飾的な機能をするものはほとんどであるが、意味的には、「の」による連体修飾になると考え、形容詞型ではなく、名詞型とした。

表6 字音接頭辞の「②形容詞型」(語数: 66 (27.7%))

② 形容詞型	<p>待遇を表わすもの 貴₁(貴商会、貴大学)、御(御意見、御両親)、権(権中将、権大納言)</p> <p>形容(動)詞の訓との対応があるもの 暗(暗紫色、暗紅色)、温(温湿布、温野菜)、緩(緩下剤、緩斜面)、貴₂(貴金属、貴婦人)、軽(軽金属、軽音楽)、古(古民家、古美術)、好(好男子、好景気)、高(高気圧、高学年)、弱(弱酸性、弱冷房)、重(重装備、重工業)、少(少人数、少納言)、新₁(新社長、新勢力)、深(深呼吸、深紅色)、聖(聖家族、聖ヨハネ)、鮮(鮮紅色、鮮緑色)、淡(淡紅色、淡黒色)、稚(稚あゆ、稚えび)、長(長期間、長距離)、低(低水準、低賃金)、等(等間隔、等価値)、同₁(同年齢、同世代)、軟(軟口蓋、軟文学)、濃(濃褐色、濃硫酸)、貧(貧書生、貧打線)、名(名校長、名コンビ)、略(略年譜、略年表)</p> <p>形容(動)詞の訓との対応がないもの 下(下学年、下半身)、希(希元素、希塩酸)、擬(擬古典主義、擬国会)、上(上半身、上機嫌)、素₁(素肌、素顔)、素(素粒子、素因数)、駄(駄菓子、駄洒落)、単(単細胞、単年度)、中(中距離、中学校)、超₁(超大国、超能力)、定(定位置、定時間)、廃(廃ビル、廃工場)、本₁(本放送、本牛革)、迷(迷探偵、迷答弁)、老(老先生、老大家)</p>
	<p>形容(動)詞の訓との対応があるもの 悪(悪習慣、悪天候)、快(快男児、快記録)、怪(怪人物、怪電話)、急₁(急角度、急カーブ)、雑(雑収入、雑所得)、主(主目的、主戦場)、純(純日本式、純国産)、小(小都市、小規模)、粗(粗収入、粗生産額)、多(多方面、多機能)、大₁(大学者、大工事)、短(短時間、短水路)、珍(珍現象、珍答案)、難(難問題、難事業)、微(微生物、微粒子)、美(美意識、美少年)</p> <p>形容(動)詞の訓との対応がないもの 異(異民族、異人種)、活(活火山、活社会)、閑(閑事業、閑文字)、旧₁(旧憲法、旧街道)、生(生石灰、生化学)、陽(陽電気、陽電子)、乱(乱気流、乱調子)</p>

形容詞型は接頭辞が後接語基に対して連体修飾的な機能を持つ。更に大きく「待遇を表わすもの」「形容(動)詞の訓との対応があるもの」「形容(動)詞の訓との対応がないもの」の3つに分けることができる。「形容(動)詞の訓との対応がないもの」も含むため、野村(1978)のように、「連体修飾型」のほうがより適切な名称だろうが、ほかの分類名はすべて品詞名であるため、「形容詞型」という品詞名で統一することにする。

表7 字音接頭辞の「③連体詞型」(語数: 43 (18.1%))

③ 連体詞型	<p>亜(亜熱帯、亜硫酸)、該(該問題、該人物)、外(外祖父、外祖母)、各(各大学、各団体)、現(現首相、現住所)、原(原判決、原日本人)、故(故博士、故高橋氏)、後(後半分、後二者)、今(今世紀、今シーズン)、再(再来週、再来月)、昨(昨シーズン、昨大会)、支(支金庫、支戦場)、次(次亜硫酸、次磷酸)、従(従三位、従五位)、准(准教授、准看護師)、準(準会員、準急行)、諸(諸問題、諸分野)、助(助監督、助教授)、正₁(正二位、正三位)、全₁(全責任、全世界)、曾(曾祖父、曾祖母)、総₁(総収入、総支配人)、続(続膝栗毛、続日本紀)、当(当劇場、当協会)、同₂(同商会、同選手)、半₁(半永久的、半製品)、汎(汎アメリカ、汎スラブ主義)、副(副収入、副知事)、某(某政治家、某課長)、本₂(本研究所、本事件)、毎(毎日曜日、毎朝)、明(明年度、明十日)、唯(唯技術主義、唯武器論)、翌(翌朝、翌八年)、来(来学期、来年度)、両(両極端、両チーム)</p>
	<p>一(一研究者、一市民)、旧₂(旧日本軍、旧大蔵省)、正(正会員、正読本)、先(先場所、先住職)、前(前学長、前近代的)、他(他方面、他球場)、分(分教場、分工場)</p>

連体詞型は、形容詞型と同様に、接頭辞が後接語基に対して連体修飾的な機能を持つ。しかし、前述したように、連体修飾には2種類がある。形容詞型は、金水(1983)の「名詞句の概念の限定・修飾」、村木(2012)の「装飾的な規定」、高橋(1997)の「カザリツケの規定語」に相当するもので、それに対し、連体詞型は、金水(1983)の「名詞句の指示機能に関する性格付け」、村木(2012)の「限定的、指定的な規定」、高橋(1997)の「キメツケの規定語」に相当するものである。

「①名詞型」「②形容詞型」「③連体詞型」は、接頭辞が後接語基に対して連体修飾的な機能を持つという点で共通するが、相違点は以下の通りである。「①名詞型」は意味上は名詞による連体修飾であり、「②形容詞型」「③連体詞型」は意味上では名詞による連体修飾ではない。「②形容詞型」は「名詞句の概念の限定・修飾」(金水1983)に相当する連体修飾であり、それに対し、「③連体詞型」は、「名詞句の指示機能に関する性格付け」(金水1983)に相当する連体修飾である。

表8 字音接頭辞の「④副詞型」(語数: 26 (10.9%))

④ 副 詞 型	過(過保護、過飽和)、皆(皆既食、皆出席)、既(既発表、既逮捕)、激(激安、激やせ)、誤(誤操作、誤作動)、再(再出発、再確認)、試(試運転、試作品)、初(初対面、初体験)、正 ₂ (正三時、正十時)、新 ₂ (新登場、新発明)、素 ₂ (素早い、素ばしこい)、全 ₂ (全三冊、全十二巻)、総 ₂ (総動員、総辞職)、即 ₁ (即実行、即退場)、超 ₂ (超満員、超人気作家)、内(内出血、内交渉)、爆(爆売れ、爆食い)、半 ₂ (半開き、半殺し)、猛(猛練習、猛反対) 急 ₂ (急停車、急上昇)、最(最先端、最優秀)、直(直取引、直弟子)、大 ₂ (大歓迎、大混乱)、棒(棒読み、棒暗記)、密(密輸入、密入国)、約(約半分、約一キロ)
------------------	---

「既」「未」などのように、副詞訓との対応がある(「既に」「未だ」)ものもあれば、「新」「誤」などのように、副詞訓との対応がない(「新しく」「誤って」)ものもある。「正」「全」「約」のように、数量名詞が後接するものがある。「ちょうど十人」「およそ三百名」(工藤2016)、「もう一週間」(村田編2005)などのように、数量名詞を修飾する副詞も存在するため、副詞型に分類した。

表9 字音接頭辞の「⑤動詞型」(語数: 27 (11.3%))

⑤ 動 詞 型	抗(抗ヒスタミン剤、抗貧血作用)、殺(殺風景、殺ダニ剤)、祝(祝合格、祝入学)、省(省エネ、省資源)、施(施餓鬼、施無畏)、送(送八百二十円、送五百円)、贈(贈山本君、贈正二位)、耐(耐高温性、耐アルカリ性)、帯(帯紅色、帯緑色)、奪(奪三振、奪タイトル)、脱(脱原発、脱工業化)、築(築五年、築八年)、駐(駐オランダ大使、駐アメリカ大使)、追(追試験、追体験)、呈(呈目録、呈川上様)、反(反主流、反体制)、防(防さび、防かび)、没(没個性、没交渉)、立(立太子、立候補) 禁(禁転載、禁帯出)、在(在ロンドン、在沖縄)、製(製パン、製かばん)、対(対前年比、対中南米輸出)、破(破廉恥、破天荒)、満(満三才、満一歳)、有(有資格者、有意義)、要(要調査、要注意)
------------------	--

動詞型については、「祝合格」を例に挙げると、「祝合格」は「合格を祝福する」という意味を表し、動詞性の接頭辞と名詞性の後接語基との間に、意味上の格関係が見られる（野村 1978 : 114）。

表 10 字音接頭辞の「⑥助動詞型」（語数：7（2.9%））

⑥助動詞型	非（非現実、非人道的）、被（被選挙権、被調査者）、未（未発表、未処理）、不（不必要、不経済）、不（不器用、不気味）、無（無愛想、無遠慮）
	無（無神経、無免許）

「非現実」は「現実ではない」という意味であり、「被選挙権」は「選挙される権利」という意味である。「非」「被」は助動詞のように機能するため、助動詞型と名付ける。

表 11 字音接頭辞の「⑦助詞型」（語数：2（0.8%））

⑦助詞型	至（至東京、至九時）、自 ₂ （自東京、自六時）
	なし

「至東京」は「東京まで」、「自六時」は「六時から」という意味である。「至」「自」は助詞のように機能するため、助詞型と名付ける。

表 12 字音接頭辞の「⑧接続詞型」（語数：3（1.4%））

⑧接続詞型	兼（首相兼外相、学長兼理事長）、即 ₂ （英語即国際語、癌即死の病）
	対（巨人対阪神、日本対中国）

「英語即国際語」は「英語すなわち国際語」という意味である。「即」などは接続詞のように機能するため、接続詞型と名付ける。「兼」「即」「対」は語基と語基の間に出現するにも関わらず、なぜ接尾辞ではなく、接頭辞と認めるかという点、「兼外相」「対巨人」は言えるが、「首相兼」「阪神対」は言えないからである。

以上が字音接頭辞の分類結果である。全体像を示すと、表 13 のようになる。

表 13 字音接頭辞の全体像

分類	語数 (比率)	説明
①名詞型	64 (26.9%)	後接語基に対して連体修飾的な機能を持つ。 意味上は、「の」による連体修飾。
②形容詞型	66 (27.7%)	後接語基に対して連体修飾的な機能を持つ。 金水 (1983) の「名詞句の概念の限定・修飾」に相当する連体修飾。
③連体詞型	43 (18.1%)	後接語基に対して連体修飾的な機能を持つ。 金水 (1983) の「名詞句の指示機能に関する性格付け」に相当する連体修飾。
④副詞型	26 (10.9%)	副詞的表現のように機能する。
⑤動詞型	27 (11.3%)	動詞性の接頭辞と名詞性の後接語基との間に、意味上の格関係が見られる。
⑥助動詞型	7 (2.9%)	助動詞のように機能する。
⑦助詞型	2 (0.8%)	助詞のように機能する。
⑧接続詞型	3 (1.3%)	接続詞のように機能する。
合計	238 (100.0%)	

5.2 字音接尾辞の分類結果

字音接尾辞 (語数 580)¹²⁾ は大きく「①名詞型」「②動詞型」「③助詞型」「④品詞分類ができないもの」の 4 種に分類する。そのうち、「①名詞型」は膨大な数があるため、更に寺村 (1968)、益岡・田窪 (1992: 33) を参考に、名詞の「特質」によって、客観的な分類基準で、「ア.もの性」「イ.こと性」「ウ.ひと性」「エ.ところ性」「オ.組織性」「カ.とき性」の 6 種に細分類する。

表 14 字音接尾辞の「①名詞型のア.もの性」(語数: 327 (56.4%))

①名詞型	ア.もの性	<p>もの性・具体 衣 (作業衣、消毒衣)、位 (名人位、正常位)、雲 (乱層雲、巻積雲)、花 (虫媒花、六弁花)、華 (亜鉛華、優曇華)、価 (予定価、結合価)、貨 (白銅貨、アルミ貨)、歌 (流行歌、主題歌)、画 (日本画、水墨画)、核 (原子核、細胞核)、楽 (交響楽、室内楽)、缶 (かに缶、石油缶)、管 (毛細管、水道管)、艦 (潜水艦、駆逐艦)、丸 (救命丸、地黄丸)、岩 (火山岩、火成岩)、旗 (国連旗、日章旗)、基 (水酸基、培養基)、器 (消化器、循環器)、機 (発電機、洗濯機)、儀 (地球儀、水準儀)、給 (時間給、初任給)、魚 (深海魚、熱帯魚)、橋 (歩道橋、可動橋)、鏡 (双眼鏡、望遠鏡)、玉 (売り玉、買い玉)、菌 (病原菌、赤痢菌)、琴 (五弦琴、七弦琴)、筋 (括約筋、骨格筋)、形 (三角形、連体形)、計 (温度計、風力計)、茎 (地下茎、地上茎)、犬 (盲導犬、秋田犬)、庫 (冷蔵庫、貯蔵庫)、口 (噴火口、突破口)、孔 (排水孔、噴気孔)、光 (直射光、白色光)、紅 (雁来紅、百日紅)、溝 (排水溝、下水溝)、鉦 (黄銅鉦、アルミニウム鉦)、鋼 (圧延鋼、特殊鋼)、歳 (十五歳、二十歳)、剤 (消化剤、防虫剤)、散 (屠蘇散、延命散)、子₁ (遺伝子、中間子)、糸 (紡績糸、中国糸)、支 (気管支、十二支)、指 (無名指、第一指)、紙 (機関紙、西洋紙)、詞 (形容詞、接続詞)、誌 (植物誌、週</p>
------	-------	--

刊誌)、寺(国分寺、円覚寺)、質(蛋白質、神経質)、車(自動車、国産車)、酒(果実酒、日本酒)、腫(麦粒腫、骨髄腫)、樹(街路樹、針葉樹)、重(うな重、提げ重)、獣(肉食獣、一角獣)、抄(史記抄、春琴抄)、傷(致命傷、打撲傷)、状(公開状、委任状)、色(保護色、乳白色)、身(八頭身、七分身)、水(化粧水、蒸溜水)、星(北極星、織女星)、石(誕生石、金剛石)、扇(換気扇、卓上扇)、船(貨物船、連絡船)、煎(ごま煎、おこげ煎)、腺(甲状腺、扁桃腺)、箋(処方箋、書簡箋)、銭(一文銭、天保銭)、素(栄養素、葉緑素)、槽(浄化槽、貯水槽)、束(プール束、分配束)、堆(大和堆、武蔵堆)、炭(活性炭、無煙炭)、弾(不発弾、照明弾)、値(平均値、偏差値)、虫(寄生虫、三葉虫)、帳(出納帳、日記帳)、鳥(保護鳥、不死鳥)、賃(電車賃、手間賃)、堤(防波堤、防潮堤)、電(留守電、至急電)、灯(信号灯、蛍光灯)、湯(葛根湯、般若湯)、筒(発煙筒、通信筒)、頭(核弾頭、藏人頭)、馬(対抗馬、出走馬)、判(新書判、A5判)、板(掲示板、回覧板)、碑(記念碑、文字碑)、費(燃料費、人件費)、標(里程標、駅名標)、品(輸出品、日用品)、符(休止符、疑問符)、文(命令文、甲骨文)、壁(火口壁、防火壁)、片(金属片、ガラス片)、偏(立心偏、行人偏)、簿(出勤簿、家計簿)、帽(登山帽、ベレー帽)、米(配給米、新潟米)、味(あま味、人間味)、名(学校名、団体名)、麵(チャーシュー麵、菓子麵)、網(鉄道網、情報網)、問(第一問、過去問)、油(潤滑油、ダイズ油)、両(五万両、二万両)、暦(太陽暦、太陰暦)、録(議事録、芳名録)

もの性・抽象 炎(盲腸炎、中耳炎)、下(意識下、支配下)、科₁(国文科、婦人科)、界(教育界、動物界)、外(想定外、問題外)、級(プロ級、課長級)、教(天理教、キリスト教)、響(N響、ポストン響)、訓(養生訓、処世訓)、元(最大元、単位元)、源(資金源、栄養源)、考(国意考、万葉考)、行₁(琵琶行、単独行)、根(平方根、累乗根)、債(学校債、地方債)、罪(横領罪、殺人罪)、殺(暗剣殺、三重殺)、志(三国志、東京名物志)、事(関心事、不祥事)、臭(貴族臭、役人臭)、中(世界中、一日中)、症(既往症、合併症)、上(教育上、理論上)、神(道祖神、七福神)、性(柔軟性、普遍性)、専(獣医畜産専、乗り専)、則(経験則、信義則)、尊(地藏尊、不動尊)、態(能動態、受動態)、調(万葉調、翻訳調)、痛(神経痛、筋肉痛)、道₁(武士道、餓鬼道)、内(子算内、期限内)、波(電磁波、周数波)、病(精神病、皮膚病)、賦(赤壁賦、早春賦)、流(西洋流、自己流)、力(経済力、思考力)

もの性・複数 科₂(ユリ科、イヌ科)、綱(哺乳綱、両生綱)

もの性・具体 詠(新春詠、日常詠)、液(水溶液、淋巴液)、円(同心円、外接円)、塩(硫酸塩、食卓塩)、音(慣用音、排気音)、角(五寸角、傾斜角)、額(生産額、残財務額)、眼(千里眼、審美眼)、記₁(航海記、探検記)、球(白ワット球、内角球)、経(大蔵経、法華経)、曲(交響曲、協奏曲)、金(奨学金、過怠金)、銀(硝酸銀、沃化銀)、吟(白頭吟、車中吟)、句(慣用句、名詞句)、具(装身具、文房具)、系(銀河系、神経系)、剣(手裏剣、斬馬剣)、拳(太極拳、じゃん拳)、券(乗車券、入場券)、語(標準語、外来語)、香(反魂香、竜ぜん香)、項(同類項、一般項)、号(ひかり号、創刊号)、骨(大腿骨、尾髭骨)、座₁(獅子座、さそり座)、菜(花椰菜、青梗菜)、材(耐熱材、吸音材)、財(文化財、生産財)、作(処女作、代表作)、札(千円札、ドル札)、酸(脂肪酸、石炭酸)、詩(散文詩、抒情詩)、字(簡体字、ローマ字)、地(洋服地、意気地)、軸(回転軸、対称軸)、式₁(方程式、電動式)、集(作品集、用例集)、銃(空気銃、機関銃)、書(参考書、申告書)、章(菊花章、会員章)、証(学生証、免許証)、節₁(従属節、修飾節)、選₁(名作選、傑作選)、錠(南京錠、糖衣錠)、食(離乳食、病人食)、図(設計図、天気図)、数(投票数、参加者数)、税(消費税、相続税)、席(指定席、貴賓席)、栓(消火栓、給水栓)、線(水平線、総武線)、膳(銘銘膳、会席膳)、

装(クロース装、革装)、層(電離層、知識層)、象(インド象、アフリカ象)、像(自画像、未来像)、体(口語体、自治体)、台(展望台、天文台)、代₁(洋服代、食事代)、題(文章題、選択題)、茶(こげ茶、そば茶)、長₁(五センチ長、三メートル長)、艇(救命艇、潜航艇)、点(問題点、合格点)、伝(英雄伝、自叙伝)、土(腐葉土、培養土)、刀(日本刀、彫刻刀)、糖(ぶどう糖、金平糖)、肉(鶏肉、竜眼肉)、杯(優勝杯、市長杯)、倍(二十倍、三十倍)、鉢(手水鉢、植木鉢)、判(A4判、四六判)、版(豪華版、改訂版)、盤(羅針盤、配電盤)、筆(万年筆、松花堂筆)、表(時刻表、一覧表)、票(調査票、浮動票)、評(映画評、下馬評)、秒(十五秒、二十秒)、便(航空便、定期便)、瓶(一升瓶、魔法瓶)、譜(皇統譜、五線譜)、部₁(心臓部、高音部)、風(季節風、西洋風)、服(作業服、既製服)、物(遺失物、障害物)、分(十五分、二十分)、分(增加分、兄弟分)、塀(板塀、煉瓦塀)、編₁(資料編、叙情編)、弁(安全弁、東京弁)、砲(高射砲、機関砲)、報(社内報、至急報)、棒(指揮棒、平行棒)、本(単行本、文庫本)、盆(地藏盆、煙草盆)、幕(揚げ幕、横断幕)、膜(横隔膜、細胞膜)、門₁(凱旋門、登竜門)、薬(消毒薬、内服薬)、様(歯ブラシ様、飛鳥様)、卵(受精卵、無精卵)、欄(投書欄、解答欄)、律(因果律、周期律)、率(合格率、円周率)、料(調味料、使用料)、量(掲載量、消費量)、炉(溶鉱炉、原子炉)

もの性・抽象 愛(人類愛、母性愛)、悪(社会悪、必要悪)、案(予算案、改定案)、格(目的格、連体格)、学(経済学、天文学)、感(解放感、責任感)、観(人生観、先入観)、間(三日間、日米間)、気(親切気、商売気)、境(恍惚境、人外境)、業(製造業、飲食業)、気(寒気、吐き気)、刑(自由刑、終身刑)、権(所有権、著作権)、差(地域差、年齢差)、策(対抗策、善後策)、算(鶴亀算、読み上げ算)、史(世界史、研究史)、識(阿頼耶識、著者識)、宗(日蓮宗、天台宗)、術(隆鼻術、処世術)、順(番号順、五十音順)、性(心配性、貧乏性)、生(半夏生、自然生)、賞(努力賞、ノーベル賞)、職(名誉職、管理職)、心(愛国心、敵愾心)、神(守護神、太陽神)、制(定時制、共和制)、積(相乗積、連乗積)、籍(日本籍、アメリカ籍)、説(愛蓮説、地動説)、相(動物相、使役相)、大₁(等身大、たまご大)、談(車中談、経験談)、体(世間体、職人体)、天(有頂天、持国天)、度(信頼度、満足度)、難(人材難、生活難)、熱(デング熱、学習熱)、能(放射能、田楽能)、美(健康美、肉体美)、癖(放浪癖、収集癖)、別(学校別、年齢別)、法(国際法、命令法)、命(建御雷命、倭姫命)、銘(座右銘、墓碑銘)、面(軍事面、資金面)、厄(前厄、後厄)、訳(口語訳、現代語訳)、欲(知識欲、出世欲)、竜(独眼竜、暴君竜)、了(全編了、上巻了)、力(神通力、千人力)、令(徴兵令、戒厳令)、論(人生論、芸術論)

もの性・複数 群(流水群、症候群)、種(イネ種)、外來種)、属(キツネ属、イネ属)、目(霊長目、甲虫目)、門₂(脊椎動物門哺乳綱、節足動物門)、類(哺乳類、爬虫類)

「ア.もの性」は寺村(1968)の「モノ性」、益岡・田窪(1992)の「もの」に相当するものである。更に大きく、「もの性・具体」「もの性・抽象」「もの性・複数」の3つに分けることができる。「もの性・具体」は五感で感じることができるものであり、「もの性・抽象」は五感で感じることができないものである。「もの性・複数」は、野村(1978)の「範疇・分野」、山下(2013b)の「分別」と重なるものが多い。

表 15 字音接尾辞の「①名詞型のイ.こと性」(語数: 25 (4.3%))

①名詞型	イ.こと性	会(大嘗会、放生会)、禍(交通禍、豪雨禍)、行 ₂ (ヒマラヤ行、ロッキー山脈行)、婚(事実婚、略奪婚)、祭(文化祭、芸術祭)、撮(スクープ撮、潜水撮)、蝕(皆既蝕、金環蝕)、審(第一審、下級審)、戦(空中戦、早慶戦)、葬(合同葬、自然葬)、打(本塁打、決定打)、展(写真展、美術展)、博(万国博、海洋博)、博(貿易博、花博)、浴(海水浴、森林浴)、立(会社立、組合立)
		会(送別会、展覧会)、忌(七回忌、三年忌)、芸(水芸、名人芸)、劇(音楽劇、時代劇)、死(安楽死、窒息死)、式 ₂ (結婚式、卒業式)、選 ₂ (参院選、都議選)、漁(こんぶ漁、サケマス漁)、礼(即位礼、立太子礼)

「イ.こと性」は寺村(1968)の「動詞性」、益岡・田窪(1992)の「こと」に相当するものである。意味上は、(6)a.のように、「(場所)で(祭、展などの)接尾辞がある」という言い方ができる。あるいは、(6)b.のように、「(場所)で(祭、展などの)接尾辞をやる/する/行う」という言い方ができる。

- (6)a. 大学で(文化)祭がある。
- b. 東京都で(都議)選をやる。

それに対し、「ア.もの性・具体」は、(7)a.と(8)a.のように、「(場所)に(艦、儀などの)接尾辞がある」という言い方ができるが、(7)b.と(8)b.で示したように、「(場所)で(艦、儀などの)接尾辞がある」という言い方や「(場所)で(艦、儀などの)接尾辞をやる/する/行う」などの言い方はできない。

- (7)a. 基地に(潜水)艦がある。
- b. *基地で(潜水)艦がある。
- (8)a. 教室に(地球)儀がある。
- b. *教室で(地球)儀をやる。

表 16 字音接尾辞の「①名詞型のウ.ひと性」(語数: 85 (14.7%))

①名詞型	ウ.ひと性	ひと性・単数 医(歯科医、漢方医)、員(銀行員、乗務員)、家(勉強家、敏腕家)、官(事務官、裁判官)、漢(熱血漢、門外漢)、汗(ジンギス汗、忽必烈汗)、監(生徒監、警視監)、鬼(吸血鬼、殺人鬼)、狂(野球狂、偏執狂)、兄(異母兄、加藤兄)、工(熟練工、機械工)、子 ₂ (読書子、編集子)、司(保護司、児童福祉司)、使(遣唐使、査察使)、姉(清水姉、同母姉)、兄(肥満兄、風雲兄)、者(既婚者、消費者)、手(運転手、交換手)、囚(死刑囚、模範囚)、女(修道女、千代女)、相(農水相、外務相)、嬢(案内嬢、受付嬢)、人(芸能人、日本人)、生(研究生、卒業生)、帝(後醍醐帝、仁徳帝)、弟(異母弟、同母弟)、奴(守銭奴、売国奴)、盗(貴金属盗、介抱盗)、尼(修道

	<p>尼、蓮月尼)、人(保証人、苦勞人)、農(小作農、自作農)、犯(常習犯、知能犯)、夫(潜水夫、消防夫)、婦(家政婦、看護婦)、補(警部補、判事補)、坊(けちん坊、あまえん坊)、某(中村某、少年某)、民(避難民、遊牧民)、吏(執行吏、税関吏)、郎(遊治郎、尚書郎)</p> <p><u>ひと性・複数</u> 家(将軍家、天皇家)、族(暴走族、斜陽族)、団(消防団、少年団)</p> <p><u>ひと性・待遇</u> 院₁(白河院、後鳥羽院)、貴(兄貴、伯父貴)、君(山田君、田中君)、軒(志道軒、精養軒)、御(父御、めい御)、公(西園寺公、信長公)、侯(浅野侯、島津侯)、齋(一刀齋、六無齋)、氏(藤原氏、中村氏)、丈(菊五郎丈、団十郎丈)、亭(末広亭、二葉亭)、輩(佐藤輩、山本輩)、拜(宮野一郎拜、佐藤拜)、伯(松方伯、後藤伯)、老(田原老、石橋老)</p> <hr/> <p><u>ひと性・単数</u> 王(打点王、三冠王)、翁(芭蕉翁、白頭翁)、客(観光客、固定客)、士(栄養士、弁護士)、師(宣教師、美容師)、主(造物主、救世主)、商(貿易商、雜貨商)、正(検事正、警視正)、僧(破戒僧、学問僧)、長₂(工場長、委員長)、通(消息通、情報通)、番(料理番、下足番)、兵(一等兵、屯田兵)、魔(電話魔、収集魔)、役(相談役、世話役)</p> <p><u>ひと性・複数</u> 軍(女性軍、巨人軍)、座₂(俳優座、文学座)、衆(子供衆、旦那衆)、衆(若い衆、旦那衆)、陣(教授陣、報道陣)、勢(徳川勢、アメリカ勢)、隊(探検隊、先遣隊)、党(自民党、甘党)、派(慎重派、保守派)、閥(東大閥、長州閥)、班(作業班、給食班)、連(悪童連、全学連)</p>
--	---

「ウ.ひと性」は益岡・田窪(1992)の「ひと」に相当するものである。更に大きく、「ひと性・単数」「ひと性・複数」「ひと性・待遇」の3つに分けることができる。「単数」は文脈によって複数の解釈になる可能性はあるが、「複数」はどのような文脈においても、複数の解釈であり、単数の解釈にはならない。

表 17 字音接尾辞の「①名詞型のエ.ところ性」(語数: 61 (10.5%))

①名詞型 エ.ところ性	<p>海(日本海、オホーツク海)、街(住宅街、商店街)、閣(天守閣、山水閣)、岸(太平洋岸、大西洋岸)、丘(火口丘、碎屑丘)、宮(エリゼ宮、水晶宮)、峡(天竜峡、層雲峡)、郷(桃源郷、温泉郷)、窟(阿片窟、貧民窟)、溪(耶馬溪、寒霞溪)、園(首都園、北極園)、湖(淡水湖、諏訪湖)、港(商業港、横浜港)、国(先進国、日本国)、山(高野山、富士山)、室(診察室、会議室)、舎(飼育舎、家畜舎)、処(補給処、弁事処)、省₁(山東省、河南省)、泉(アルカリ泉、硫黄泉)、荘(若葉荘、富士荘)、帯(火山帯、森林帯)、池(貯水池、養魚池)、町(永田町、有楽町)、邸(徳川邸、新築邸)、田(休耕田、ガス田)、殿(紫宸殿、伏魔殿)、島(無人島、バリ島)、道₂(東海道、自動車道)、洞(鍾乳洞、秋芳洞)、墳(前方後円墳、一号墳)、峰(無名峰、理想峰)、房(独居房、十九房)、陵(仁徳陵、仁徳天皇陵)、林(原始林、防風林)、路(滑走路、十字路)、麓(西南麓、東北麓)</p> <hr/> <p>京(平安京、藤原京)、区(自治区、品川区)、郡(埼玉県北足立郡、静岡県賀茂郡)、県(青森県、三重県)、座₃(スカラ座、歌舞伎座)、市(横浜市、京都市)、州(アジア州、テキサス州)、城(江戸城、大阪城)、場(運動場、競技場)、村(沖縄県国頭村、日吉津村)、宅(高橋さん宅、鈴木さん宅)、端(東北端、滑走路端)、地(国有地、避暑地)、塔(管制塔、テレビ塔)、棟(研究棟、三号棟)、堂(公会堂、議事堂)、藩(仙台湾、長州藩)、府(大阪府、太宰府)、辺(静岡辺、東京辺)、洋(太平洋、大西洋)、領(仙台領、イギリス領)、寮₁(独身寮、母子寮)、楼(摩天楼、山水楼)、湾(東京湾、鹿児島湾)</p>
----------------	--

「エ. ところ性」は寺村（1968）の「トコロ性」、益岡・田窪（1992）の「ところ」に相当するものである。意味上は、(9)のように、「(島、城などの) 接尾辞へ行きます」という言い方ができる。

- (9)a. (無人) 島へ行きます。
- b. (大阪) 城へ行きます。

それに対し、「ア. もの性・具体」を持つ接尾辞は、そのままでは、「(艦、儀などの) 接尾辞へ行きます」という言い方ができず、「へ」の前に「のところ」を付け加えなければならない。

- (10)a. *(潜水) 艦へ行きます。
- b. (潜水) 艦のところへ行きます。

表 18 字音接尾辞の「①名詞型のオ. 組織性」(語数：25 (4.3%))

①名詞型	オ. 組織性	委 (中労委、特別委)、院 ₂ (人事院、美容院)、館 (図書館、博物館)、協 (合成ゴム協、○○連絡協)、研 (極地研、国語研)、高 (付属高、女子高)、講 (無尽講、富士講)、省 ₂ (外務省、法務省)、中 ₁ (付属中、第三中)、店 (喫茶店、百貨店)、舗 (菓子舗、新聞舗) 駅 (始発駅、東京駅)、園 (保育園、動物園)、課 (会計課、人事課)、局 (事務局、出版局)、校 (予備校、名門校)、社 (旅行社、出版社)、塾 (学習塾、進学塾)、所 (事務所、刑務所)、署 (税務署、警察署)、大 ₂ (女子大、教育大)、庁 (警視庁、気象庁)、部 ₂ (経理部、宣伝部)、寮 ₂ (図書寮、大学寮)、労 (地区労、全炭労)
------	--------	--

「オ. 組織性」は寺村（1968）、益岡・田窪（1992）にない分類であり、「ウ. ひと性」と「エ. ところ性」の両方の性質を持っている。意味上は、(11)a. のように、「(館、署などの) 接尾辞へ行きます」という言い方ができる。同時に、(11)b. のように、「(館、署などの) 接尾辞に勤めています」という言い方もできる。

- (11)a. (博物) 館へ行きます。
- b. (博物) 館に勤めています。

一方、「エ. ところ性」しか持たない接尾辞は、(12)a. のように、「(島、城などの) 接尾辞へ行きます」という言い方はできるが、(12)b. のように、「(島、城などの) 接尾辞に勤めている」という言い方はできない。

- (12)a. (無人) 島へ行きます。

- b. *(無人) 島に勤めています。

表 19 字音接尾辞の「①名詞型のカ.とき性」(語数：18 (3.1%))

①名詞型	カ.とき性	紀(白亜紀、ジュラ紀)、時(非常時、退出時)、初(明治初、六月初)、尽(三月尽、九月尽)、世(洪積世、更新世)、日(五十日、第三日)、末(学期末、年度末)、夜(十五夜、十三夜)、来(数日来、昨年来)、歴(政治歴、サッカー歴)
		期(少年期、反抗期)、後(夕食後、放課後)、週(最終週、第二週)、節 ₂ (紀元節、端午節)、前(開会前、紀元前)、代 ₂ (古生代、三十代)、朝(平安朝、奈良朝)、年(成立年、国際婦人年)

「カ.とき性」は寺村(1968)の「トキ性」、益岡・田窪(1992)の「とき」に相当するものである。

以上は名詞型の字音接尾辞である。次に、名詞型以外のものをみる。

表 20 字音接尾辞の「②動詞型」(語数：29 (5%))

②動詞型	化(映画化、合理化)、完(冷暖房完、全十冊完)、刊(本日刊、集英社刊)、産(北海道産、アメリカ産)、視(重要視、問題視)、寂(明治十六年寂、昭和初年寂)、走(五十メートル走、百メートル走)、卒(高校卒、平成十年卒)、築(昭和初年築、平成七年築)、着(東京着、八時着)、超(六〇キログラム超、二千円超)、泊(車中泊、別府温泉泊)、発(東京発、十時発)、没(昭和二十年没、一九〇〇年没)、略(以下略、日本科学史略)
	可(分割払い可、栄養可)、記 ₂ (八月十日記、三月五日記)、減(三百減、収穫減)、述(鈴木博士述、夏目鏡子述)、製(自家製、金属製)、増(定員増、自然増)、蔵(法隆寺蔵、国立博物館蔵)、著(太田氏著、三島由紀夫著)、動(水平動、上下動)、秘(社外秘、部外秘)、比(前年比、前年同期比)、編 ₂ (日本語学会編、文化庁編)、亡(二月八日亡、三月二日亡)、用(子ども用、実験用)

動詞型は名詞性の前接語基と動詞型の接尾辞との間に、意味上の格関係をもつとともに、「…スルコト」という動作性の意味を有するものであるため、「①名詞型のイ.こと性」と共通し、明確に分けられないものがある(野村 1978 : 118)。

表 21 字音接尾辞の「③助詞型」(語数：5 (0.9%))

③助詞型	強(五キロ強、五百円強)、弱(五キロ弱、三千名弱)、半(一時半、五メートル半)、余(五十年余、十人余)
	等(飲む歌う等の行為、鉛筆・紙・消しゴム等の学用品)

「強」「弱」「半」「余」「等」は「五キロくらい歩いた」、「参加者は三千名ほどだ」のようにとりたてた助詞「くらい」「ほど」と似た機能を果たすため、これらを「助詞型」とした。

表 22 字音接尾辞の「④品詞分類ができないもの」(語数：5 (0.9%))

④品詞分類ができないもの	的(論理的、精神的)、然(学者然、得意然)、中 ₂ (交渉中、仕事中)、裏(秘密裏、盛会裏)
	ー(世界一、日本一)

「的」「然」「中」「裏」「一」は、「品詞」を考えるのが難しい。例えば、「的」は合成語全体を形容動詞にする機能を持つ重要な接尾辞であるが、表す意味の抽象度が高いため、「的」自体の「品詞」を考えるのが難しい。「中」は「ている」などで表されるアスペクトの意味を表すが、品詞とは何かと考えると、難しい問題である。これらをうまく分類できなかった。この5つの位置づけは今後の課題とする。

以上は字音接頭辞の分類結果である。全体像を示すと、表 23 のようになる。

表 23 字音接尾辞のまとめ

分類		寺村 (1968)	益岡・田窪 (1992)	文法テスト	語数 (比率)
①名詞型	ア. もの性	モノ性	もの	○(場所)にSがある。 ×(場所)でSがある。	327 (56.4%)
	イ. こと性	動詞性	こと	×(場所)にSがある。 ○(場所)でSがある。	25 (4.3%)
	ウ. ひと性	×	ひと	なし	85 (14.7%)
	エ. ところ性	トコロ性	ところ	○Sへ行く。 ×Sに勤めている。	61 (10.5%)
	オ. 組織性	×	×	○Sへ行く。 ○Sに勤めている。	25 (4.3%)
	カ. とき性	トキ性	とき	なし	18 (3.1%)
②動詞型		名詞性の前接語基と動詞型の接尾辞との間に、意味上の格関係が見られる。			29 (5.0%)
③助詞型		主にとりたて助詞と似た機能を果たすもの。			5 (0.9%)
④品詞分類ができないもの		品詞的に分類することができなかったもの。			5 (0.9%)
合計					580 (100.0%)

6. おわりに

本稿は、分類基準を統一し、かつ客観的な分類基準を用いて、字音接頭辞と字音接尾辞を同様に品詞的に分類することを試みた。

「分類基準を統一する」こととは、字音接頭辞と字音接尾辞を同様に品詞的に分類することを意味するが、ここで字音接辞を品詞的に分類することについて一言付け加えて

おきたい。「品詞分類」は文法論の概念であり、語を機能、形態などの文法的性質によって分類したものである。しかし、本稿では、字音接辞を品詞的に分類するにあたり、「機能」「形態」ではなく、「意味」によって分類した面が強い。例えば、「低水準」の「低」は「低い」という意味を表すため、形容詞型に分類し、「既発表」の「既」は「すでに」という意味を表すため、副詞型に分類した。

また、本稿でいう「客観的な分類基準を用いる」ことは、意味・概念を分類基準として採用しないということを意味しない。表 13 と表 23 で示した分類の全体像のように、各分類の間にどのような関係や相違点が見られるのかを示した。しかし、それが本稿の「客観性」を十分に担保できるかという点と、そうではないということも事実だろう。本稿の主張する「客観性」が十分に担保される字音接辞の分類は現段階ではまだ難しい点が残され、字音接辞の分類にいかん客観性を持たせることができるかが本稿の課題であった。字音接辞を分類するという点とは一体どのようなことなのかを今後も考え続けていく必要があるだろう。

最後に、今後の課題として、まず、漢語一字の字音接辞は抽出できるが、二字漢語の中に、「当該中学校」「当該チーム」の「当該」のように、字音接辞だと考えられるものもある。二字の字音接辞をどのように抽出するのは今後の課題とする。

また、本稿は、いわゆる助数詞の位置づけについて少々疑問を感じるし、本稿のデータの取り方で助数詞を抽出することができなかった。そのため、本稿では、助数詞を取り上げていない。野村 (1978) と石川 (2016) は、「助数詞」という分類がある。山下 (2013b) は「類別」という名称である。漢語の助数詞を字音接辞に入れるかどうかは今後の課題である。

更に、本稿は、「現代日本語」を対象とするが、「該事件」「該人物」の「該」のように、現代日本語ではすでに使われていない字音接辞もたくさん抽出した。コーパスで個々の字音接辞の使用実態を調査し、記述的研究を進めるうちに、本稿の分類結果を改善していく必要がある。

注

- 1) 表 1 の二重下線、点線、波線は引用者によるものである。下線は原文によるものである。
- 2) 原文は縦書きであるため、傍線になるが、表 1 は横書きであるため、原文の傍線に相当するものは下線になる。
- 3) 『日本語百科大事典』においては、「接辞」という項目がない。「文法的単位」の下位項目の「語構成」の記述に「接辞」の定義があり、それを引用した。
- 4) 『新版日本語教育事典』においては、「接辞」という項目がない。「接頭辞 (接頭語)」「接尾辞 (接尾語)」という項目の記述を引用した。

- 5) 実際に、森岡 (1994) のように、字音接辞を狭く捉え、「御 (ゴ)」しか認めないという立場もある。
- 6) 本稿では、「字音接辞」という用語を使用するが、先行研究を引用するときは、「漢語系接辞」「接辞性字音語基」など、先行研究の術語に従うこととする。
- 7) ただし、「当大学」の「当」、「本研究所」の「本」、「同美術館」の「同」などは、独自にアクセント核を持っており、その後につく語基の間にポーズが置かれることから、接辞の性質に違反し、接頭辞とは認めず、連体詞と見做す立場 (村木 2004、工藤 2014 など) もある。
- 8) 下線部は引用者によるものである。
- 9) 阪倉 (1986:5) では、「語源的な観点からする分析は、少なくとも現代語の語構成を考える場合には、持ち込んでいけないことになっている」という指摘があり、本稿もそれに賛同する立場である。
- 10) 本稿は「品詞」という基準で接辞を分類する。品詞とは単語の形態、機能などの文法的性質による分類である。品詞は単語の分類であるため、接辞という形態素レベルには当てはまらないが、ここでは、「品詞のレベルで考える」「品詞のように考える」という意味で使うことを予め断っておく。
- 11) このように、同じ音形である「自」が、異なる分類になる場合があるので、それぞれ分けて、2つにカウントした。
- 12) 同じ音形であるが、接頭辞と接尾辞の両方になるものについては、それぞれ分けてカウントした。例えば、「悪」は接頭辞として、「悪天候」のように形容詞型になると同時に、接尾辞として、「社会悪」のように名詞型にもなるため、「悪」を2つにカウントした。

参考文献

引用文献

- 秋元美晴 (2005) 「単純語」日本語教育学会 (編) 『新版日本語教育事典』. p.240. 大修館書店.
- 石井正彦 (2007) 「複合語」飛田良文 [他] (編) 『日本語学研究事典』. pp.169-170. 明治書院.
- 石川創 (2016) 「接頭語・接尾語」『品詞別 学校文法講座 第四巻 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』 pp.86-107. 明治書院.
- 石野博史 (1988) 「語構成」金田一春彦・林大・柴田武 (編) 『日本語百科大辞典』. pp.418-419. 大修館書店.
- 金水敏 (1983) 「連体詞」『研究資料日本古典文学 第十二巻 文法』 pp.122-125. 明治書院.

- 工藤浩 (2014) 「連体詞」 日本語文法学会 (編) 『日本語文法事典』. pp.678-679. 大修館書店.
- 工藤浩 (2016) 「「たった」は副詞か連体詞か」 『副詞と文』 pp.159-165. ひつじ書房.
- 斎賀秀夫 (1957) 「語構成の特質」 岩淵悦太郎・林大・大石初太郎・柴田武 (編) 『講座現代国語学Ⅱ ことばの体系』. pp.217-248. 筑摩書房.
- 斎藤倫明 (2005) 「語構成 (文法論から)」 日本語教育学会 (編) 『新版日本語教育事典』. pp.66-67. 大修館書店.
- 斎藤倫明 (2007) 「接頭語」「接尾語」 飛田良文 [他] (編) 『日本語学研究事典』. pp.166-168. 明治書院.
- 斎藤倫明 (2016) 『語構成の文法的側面についての研究』 ひつじ書房.
- 阪倉篤義 (1980) 「接辞」 国語学会 (編) 『国語学大辞典』. pp.551-552. 東京堂出版.
- 阪倉篤義 (1986) 「接辞とは」 『日本語学』 5-3. pp.4-10. 明治書院.
- 高橋太郎 (1997) 「連体機能をめぐって」 川端善明・仁田義雄 (編) 『日本語文法 体系と方法』 pp.301-316. ひつじ書房.
- 寺村秀夫 (1968) 「日本語名詞の低位分類」 『日本語教育』 12. pp.42-57. 日本語教育学会.
- 野村雅昭 (1974) 「三字漢語の構造」 『国立国語研究所報告 51 電子計算機による国語研究Ⅵ』 pp.37-62. 国立国語研究所.
- 野村雅昭 (1977) 「造語法」 『岩波講座日本語 9 語彙と意味』 pp.245-284. 岩波書店.
- 野村雅昭 (1978) 「接辞性字音語基の性格」 『国立国語研究所報告 61 電子計算機による国語研究Ⅸ』 pp.102-138. 国立国語研究所.
- 野村雅昭 (1987) 「複合漢語の構造」 『朝倉日本語新講座 1 文字・表記と語構成』. pp.130-144. 朝倉書店.
- 野村雅昭 (1988) 「二字漢語の構造」 『日本語学』 7-5. pp.44-55. 明治書院.
- 野村雅昭 (1998) 「現代漢語の品詞性」 東京大学国語学研究室創設百周年記念国語研究論集編集委員会 (編) 『東京大学国語学研究室創設百周年記念国語研究論集』. pp.128-144. 汲古書院.
- 野村雅昭 (1999) 「字音形態素考」 『国語と国文学』 76-5. pp.1-10. 東京大学.
- 野村雅昭 (2013) 「品詞性による字音複合語基の分類」 野村雅昭 (編) 『現代日本漢語の探究』. pp.134-145. 東京堂出版.
- 早津恵美子 (2005) 「形態素」 日本語教育学会 (編) 『新版日本語教育事典』. pp.232-233. 大修館書店.
- 北條正子 (1973) 「主要接辞・助数詞一覧」 『品詞別日本文法講座 10 品詞論の周辺』 pp.231-272. 明治書院.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』 くろしお出版.

- 水野義道（1987）「漢語系接辞の機能」『日本語学』5-3. pp.60-69. 明治書院.
- 宮島達夫（1980）「語構成」国語学会（編）『国語学大辞典』. pp.423-427. 東京堂出版.
- 宮島達夫（1994）『語彙論研究』むぎ書房.
- 宮地裕（1973）「現代漢語の語基について」『語文』31. pp.68-80. 大阪大学国語国文学会.
- 村木新次郎（2004）「漢語の品詞性を再考する」『同志社女子大学日本語日本文学』16. pp.1-35. 同志社女子大学.
- 村木新次郎（2012）『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房.
- 村田美穂子編（2005）『文法の時間』至文堂.
- 森岡健二（1994）『日本文法体系論』明治書院.
- 山下喜代（2004）「日本語教育における語彙指導一字音接辞の指導を中心にして一」『青山語文』34. pp.142-153. 青山学院大学日本文学会.
- 山下喜代（2008）『日本語教育のための合成語データベース構築とその分析』（平成17年度～平成19年度科学研究費補助金研究成果報告書）
- 山下喜代（2013a）「現代日本語における漢語接辞研究の概観」『青山語文 大上正美教授退任記念号』43. pp.157-168. 青山学院大学日本文学会.
- 山下喜代（2013b）「接辞性字音形態素の造語機能」野村雅昭（編）『現代日本漢語の探究』. pp.83-108. 東京堂出版.

辞書・辞典・事典類

- 『岩波国語辞典 第7版』（2009）西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫（編）. 岩波書店
- 『学研現代新国語辞典 改訂第五版』（2012）金田一春彦・金田一秀穂（編）. 学研教育出版
- 『言語学大辞典第6巻 術語篇』（1996）亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）. 三省堂
- 『国語学研究事典』（1977）佐藤喜代治（編）. 明治書院
- 『国語学大辞典』（1980）国語学会（編）. 東京堂出版
- 『三省堂国語辞典 第七版』（2014）見坊豪紀・市川孝・飛田良文・山崎誠・飯間浩明・塩田雄大（編）. 三省堂
- 『集英社国語辞典 [第3版]』（2012）森岡健二・徳川宗賢・川端善明・中村明・星野晃一（編）. 集英社
- 『新選国語辞典 第九版』（2011）金田一京助・佐伯梅友・大石初太郎・野村雅昭（編）. 小学館
- 『新明解国語辞典 第七版』（2012）山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之（編）. 三省堂

- 『大辞林 第三版』(2006) 松村明 (編). 三省堂
『日本語学研究事典』(2007) 飛田良文 [他] (編). 明治書院
『新版日本語教育事典』(2005) 日本語教育学会 (編). 大修館書店
『日本語大事典』(上) (2014) 佐藤武義・前田富祺 (編). 朝倉書店
『日本語百科大事典』(1988) 金田一春彦・林大・柴田武 (編). 大修館書店
『日本語文法事典』(2014) 日本語文法学会 (編). 大修館書店

付記

本稿は、第114回漢字漢語研究会(2017年7月27日於早稲田大学)における口頭発表の内容に基づき、加筆修正したものである。発表の席上、野村雅昭氏、山下喜代氏、笹原宏之氏、田村夏紀氏をはじめ、多くの方々からご助言を賜うることができた。記して感謝申し上げます。ご助言を十分に反映できていない点も多いが、言うまでもなく、すべての責は筆者に帰する。

(ちょう・めい 博士後期課程)